

## 5 香川県内遺跡発掘事業

香川県教育委員会では、埋蔵文化財を適切に保護するため、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査や遺跡発掘調査を継続して行ってきた。

本事業では、国や県等が主体となる種々の開発事業に対する事前の調整を図ることを主眼として、遺跡の分布・試掘調査や遺跡保存のための範囲確認調査等を行っており、実施機関は香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課である。

平成26年度からは、当センターが開発事業者に応じて事業の一部を分担してきたが、平成29年度からすべての開発事業者と事前協議、分布・試掘調査を行い、開発事業実施前に埋蔵文化財の保護に関わる必要な資料の作成を行ってきた。またそのほか、遺跡保存のための範囲確認調査も分担している。

今年度は、開発に係わる分布・試掘調査、及び遺跡保存のための範囲確認調査を行った。前者については、別に刊行した『埋蔵文化財試掘調査報告32 - 令和元年度香川県内遺跡発掘調査 -』に報告した。以下では、県指定史跡今岡古墳について、追加指定のための資料を得ることを目的として実施した、範囲確認調査の成果を報告する

### いまおか 今岡古墳

今岡古墳は、高松平野西端に屹立する勝賀山(標高364m)より南東に派生する尾根端頂部(標高62m)に築造された、古墳時代前期後葉の前方後円墳である(第24図)。古墳前面には本津川が北流し、本津川を介して石清尾山と対峙する。古墳は、勝賀山東麓の丘陵群の中で、最も東に長く張り出した丘陵上に築造されている。古墳からは、前面に所在する石清尾山により東への眺望を遮られるが、北は本津川河口から瀬戸内海が、南は香東川下～中流域の高松平野西縁部及び遠く讃岐山脈を眺望することが可能で、こうした可視範囲を意識して、本墳の築造位置が選定されたと考えられる。また、本墳の南約4kmに所在する中間西井坪遺跡では、円筒埴輪や土師質の土製棺を焼成した、埴輪焼成遺構が検出され、そこで焼成された埴輪類や土製棺が、本墳へ運ばれた可能性が指摘されている。本墳の被葬者の政治・経済的基盤の具体像を明らかにする上で、重要な資料と考えられる。

本墳は、古くより円筒埴輪や家形埴輪等が供献された前方後円墳として知られ、前方部上で土師



第24図 遺跡位置図(1/25,000)



写真47 5トレンチ全景(西から)

質焼成の土製棺が出土する等したことから、1957（昭和32）年に県の史跡に指定され、保存されてきた。また、1964（昭和39）年には、その土師質の土製棺の調査が実施され、内部より舶載鏡を含む豊富な副葬品が出土した。しかしながら、これまで測量調査や一部の出土遺物の資料化がなされたのみで、墳長約60mもしくは70mの古墳時代中期前葉の前方後円墳ということ以上に、詳細な古墳の規模や構造等については、不明な点が多かった。古墳時代前期から続く、高松平野の前方後円墳の系譜の中で、長崎鼻古墳と共に最も新しい時期に築造された古墳の一つとして重要な位置を占め、その適切な保護や活用を図るためにも、資料の整備が喫緊の課題であった。こうしたことから、平成29年度より、古墳の正確な範囲を確認し、適切な保護を図ることを目的として発掘調査を実施してきており、本年度は後円部に、トレンチ1か所（5トレンチ）を設定し、調査を実施した（第25図）。調査面積は7.2㎡である。なお、調査は高松市教育委員会と合同で実施しており、市教育委員会は今年度、前方部でトレンチ1か所（6トレンチ）の調査を担当した。

### 5トレンチの調査

5トレンチは、平成29年度に実施した1トレンチの南約6.5mに位置する。幅0.2～1.0m、平面長9.1mの東西に長いトレンチである。1トレンチでは、上下2段の平坦面が検出され、墳丘の段築に関する遺構と考えられた。5トレンチでは、1トレンチで確認された平坦面の性格を、より詳細に明らかにすることを目的として位置を設定した。

5トレンチでは、現代の攪乱土（第26図1層）や表土（同図2層）、近年の果樹園造成時と考えられる造成土（同図3層）、旧表土（同図4層）を取り除くと、トレンチ中央部で2箇所（同図5層）の長径1.2m前後の土坑状の落ち込みを検出した。いずれも埴輪片や葺石と考えられる円礫を含



写真48 5トレンチ近景  
(西から、奥に石清尾山を遠望)



写真49 5トレンチ近景(南西から)



写真50 平坦面2上面遺物出土状況(西から)



写真51 平坦面2土層(北東から)

む斜面堆積土（同図6層）上面より掘り込まれていることから、近年の植樹痕もしくは風倒木痕と考えられる。

上述した斜面堆積土の下面では、トレンチ中央部で花崗岩の岩盤が露出し、その上下で平坦面を検出した。上位の平坦面（平坦面1）は、標高57.95～58.25 m以上で検出した、幅1.8 m以上のテラス面で、上位に埴輪片を含む流土（同図7層）が堆積していた。1 トレンチの平坦面1とやや検出した標高値は異なるものの、一連の平坦面の可能性が高いと判断され、段築テラス面の可能性が考えられる。7層中からは、埴輪片や葺石以外に遺物は出土しておらず、古墳築造後の比較的早い時期に、上位の墳丘の一部が崩落・堆積したものと考えられ、テラス面は古墳築造時のものである可能性が高いが、礫敷等の遺構は認められなかった。

下位の平坦面（平坦面2）は、標高56.45 m前後で検出した、幅1.4 m以上の平坦面で、より東側は現代の攪乱溝や果樹園造成時の削奪を被っており、正確な幅については明らかにできていない。平坦面上には、暗灰黄色土の流土層（同図8層）が堆積するが、本層からは埴輪片や葺石は一切出土していない。人為的な盛土層である可能性は低く、墳丘1段斜面部の崩落土である可能性が考えられ、1段斜面部は地山を削り出したままで葺石等は施されず、またそのテラス面上には埴輪が樹立されていなかったことを示唆するものとする。

5 トレンチからは、多量の円筒埴輪や朝顔形埴輪以外には、形象埴輪として家形埴輪とみられる小片が少量出土したのみで、埴輪類以外には遺物は出土していない。

## まとめ

5 トレンチの調査について、1 トレンチの調査結果と合わせて考えると、平坦面2は墳裾基底部のテラス面、平坦面1は第1段テラス面と考えられ、1段目の墳丘高は1.5～1.8 mに復元できる。また1段目は、専ら基盤層を削り出して造成され、盛土等は認められず、5 トレンチでは基底部テラス面上に堆積した流入土中に葺石や埴輪が認められなかったことから、1・2段目の斜面部に葺石は施されず、1段目テラス面への埴輪による加飾は省略された可能性が考えられた。こうした想定の妥当性については、なお追加の調査を必要とするが、これまでの後円部の調査から推測される1案として提示したい。さらに、後円部の2か所のトレンチからの推定ではあるが、後円部基底線はほぼ正円を描くことが想定され、前方部前面の基底部の標高は57.4 m前後であること（香川県埋蔵文化財センター2019）から、後円部と前方部の比高差は約1 mと、墳丘基底部が水平に近く設定されていることは、本地域の前期以来の丘陵上に立地する前方後円墳の築造方法等の変遷観より、新しい様相と理解できる（蔵本1995）。なお、後円部の第1段テラス面から墳頂部までは4 m前後を測り、後円部は3段築成であった可能性があるが、この点は今後の課題としたい。

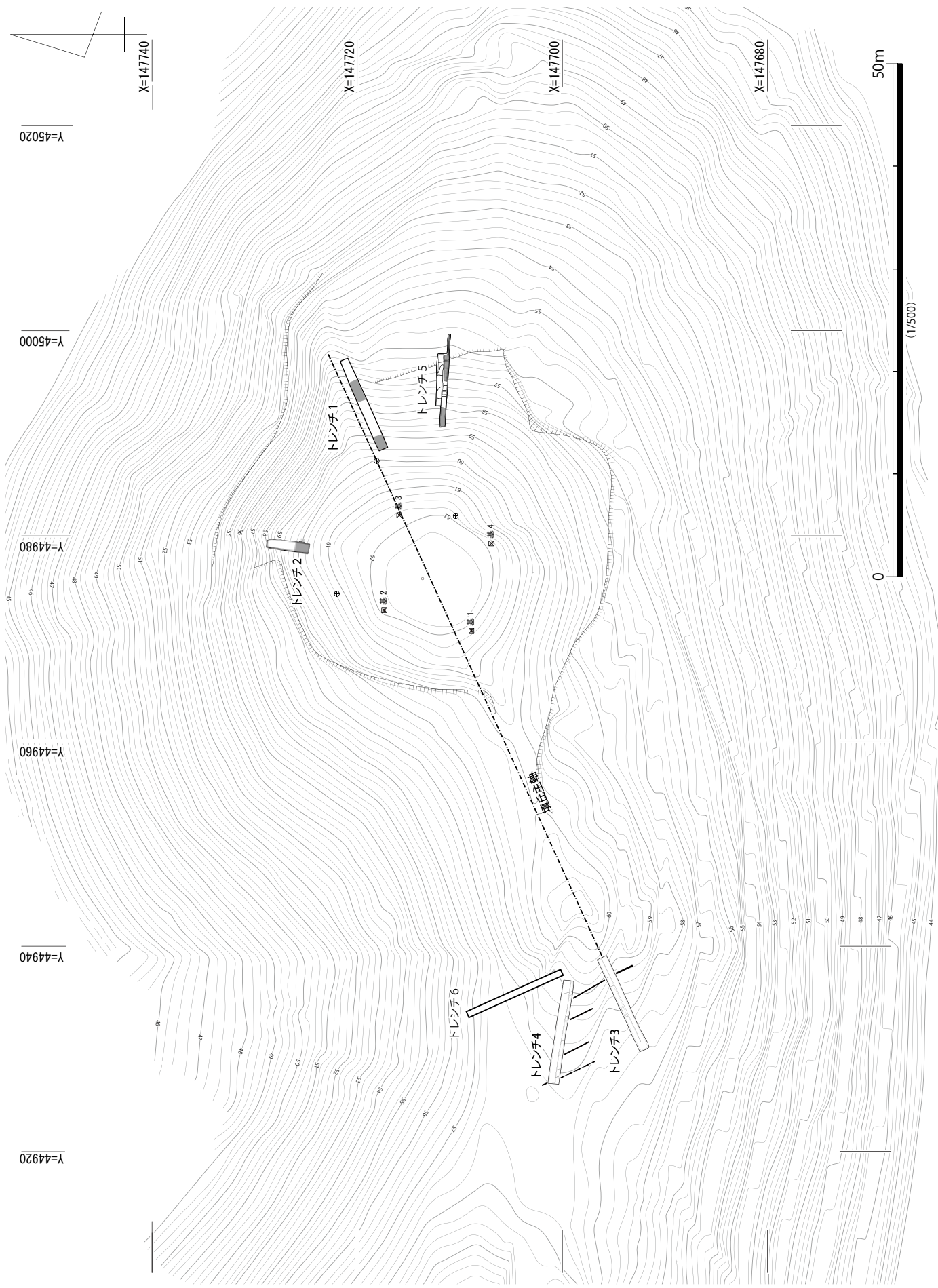
最後に、今年度までの調査を踏まえると、本墳は全長65.9 m、後円部径約35 m、同高約6 m、前方部高約3.4 m、墳丘主軸TN65.6° Eの前方後円墳と考えられる。

## 引用・参考文献

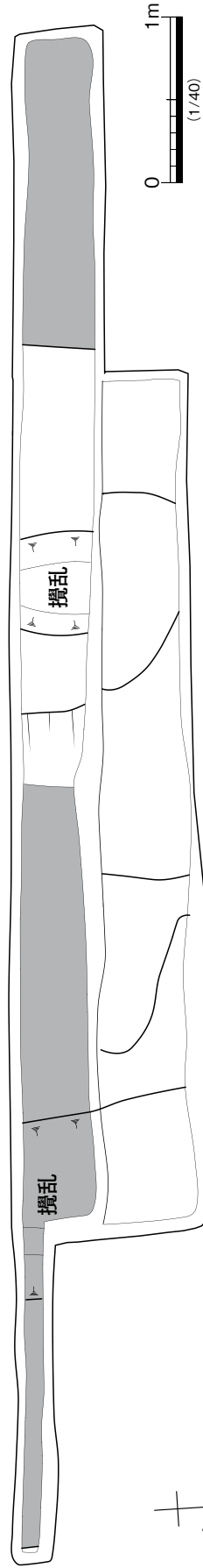
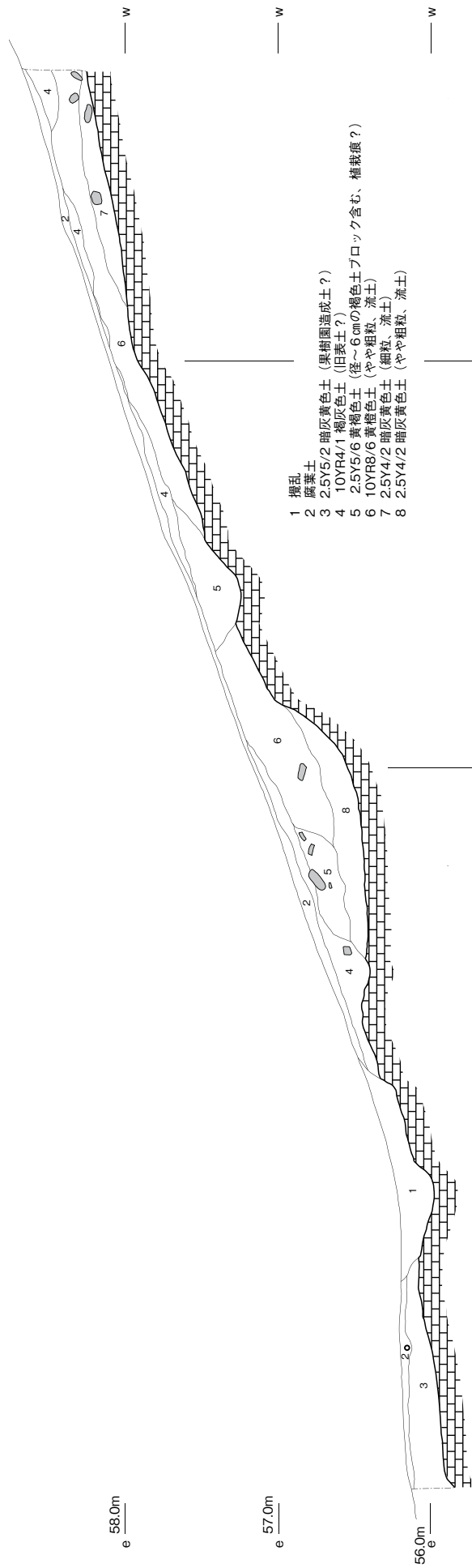
香川県埋蔵文化財センター2019「今岡古墳」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成30年度』

蔵本晋司1995「香川県高松市三谷石舟古墳の再検討」『香川考古』第4号、香川考古刊行会





第 25 図 トレンチ配置図

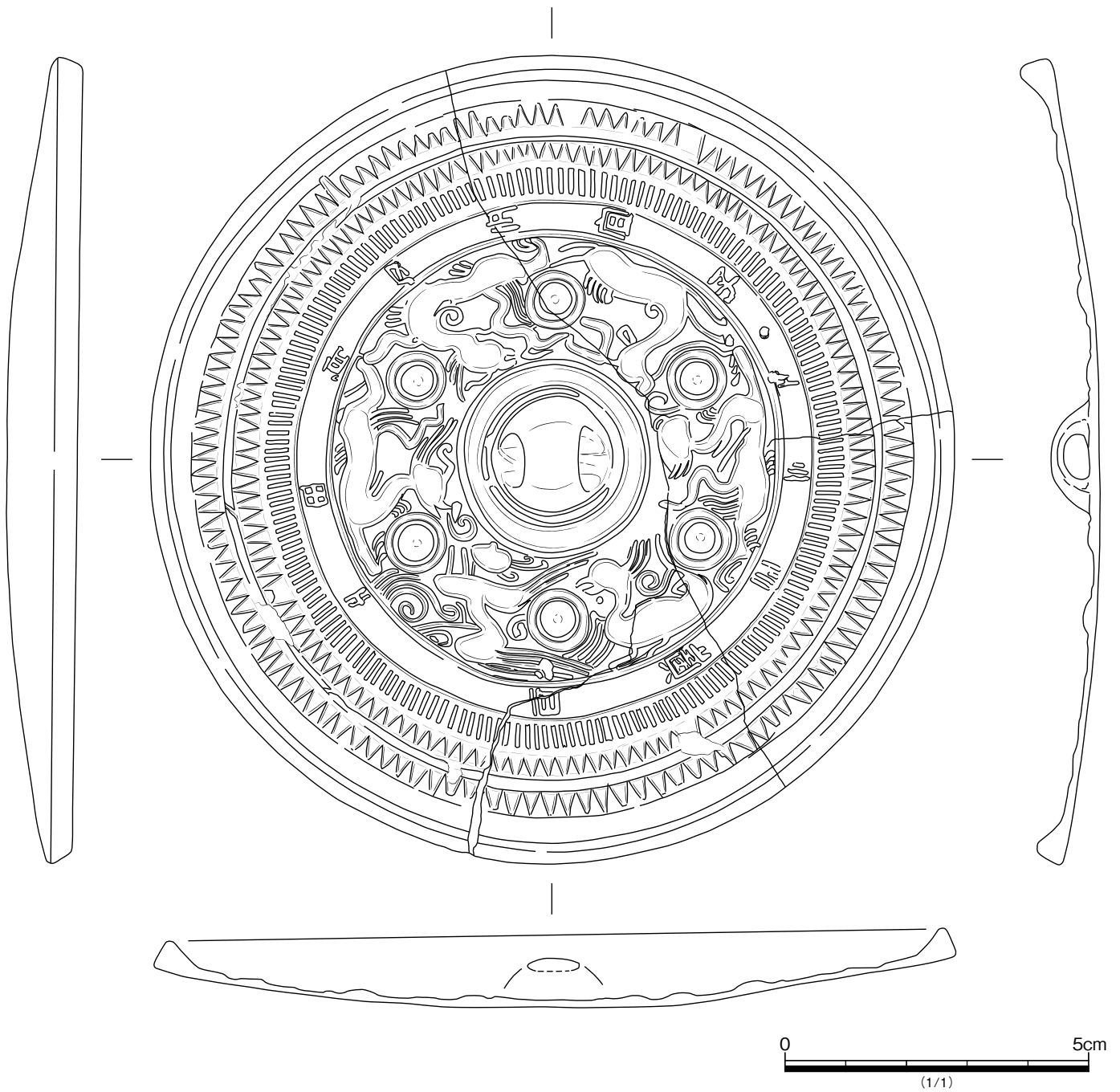


Y=44995.00

Y=44990.00

X=147715.00

第26図 5トレンチ平・断面図



第 27 図 前方部土製棺出土銅鏡実測図（香川県埋蔵文化財センター保管）

#### 付論

第 27 図は、1964 年の前方部の土師質土製棺の調査時に、棺内より出土した銅鏡である。面径 13.2cm、重量 207.80 g、縁高 0.5cm の斜縁上方作銘獸帯鏡で、図右半部を中心に 4 片に割れており、現在接着剤により補修されている。破損の時期は不明だが、完鏡で副葬されたと考えられる。鏡背面の図像は精緻で、鑄上がりも良好だが、図像は浅く、やや曖昧模糊とした印象を受ける。漢鏡 7 期、2 世紀後半の製作から間もない時期に列島に流入したとされる鏡群（岡村秀典 1992「浮彫式獸帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』、出雲考古学研究会）で、本墳への副葬までに長期の保有が想定され、入手から副葬までの経緯について、機会があれば検討を試みたい。（蔵本）